

久富木原玲教授 著書・論文

著書・論文・その他

I 著書

● 単著

- 一 『源氏物語 歌と呪性』(中古文学研究叢書5) 若草書房、一九九七年一〇月
- 二 『源氏物語の変貌―とはずがたり・たけくらべ・源氏新作能の世界―』おうふう、二〇〇八年三月
- 三 『源氏物語と和歌の論―異端へのまなざし』青簡社、二〇一七年三月

● 編著・共編著

- 一 『和歌とは何か』(『日本文学を読みかえる』3)(編著)有精堂、一九九六年六月
 - 二 『源氏物語の歌と人物』(共編著)翰林書房、二〇〇九年五月
 - 三 『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として―』(共編著)翰林書房、二〇一二年三月
- 共著(単行本)

- 一 鈴木日出男・藤井貞和編『日本文芸史』第二卷(河出書房新社、一九八六年一〇月)
- 二 岩波講座『日本文学史』(五)岩波書店、一九九五年一一月

- 三 久保田淳・野山嘉正・堀信夫編『日本秀歌秀句の辞典』小学館、一九九五年三月
 - 四 久保田淳編『日本文学史』おうふう、一九九七年五月
 - 五 佐佐木幸綱編『短歌名言辞典』東京書籍、一九九七年一〇月
 - 六 久保田淳・馬場あき子編『歌ことは歌枕大辞典』角川書店、一九九九年五月
 - 七 週刊朝日百科『枕草子 土佐日記』〈世界の文学25〉一九九九年二月号
 - 八 小町谷照彦外編『王朝文学文化歴史事典』笠間書院 二〇一二年一月
 - 九 『源氏物語事典』大和書房 二〇〇二年五月
 - 一〇 『三省堂名歌名句辞典』三省堂二〇〇四年九月
 - 一一 愛知県立大学蔵「ことさ」(住吉物語絵) 紹介と解題『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として』翰林書房二〇一二年三月(名倉ミサ子氏との共同執筆)
 - 一二 愛知県立大学蔵「源氏絵色紙」二七図 書誌と解題 上掲書(一一)に同じ(高橋亨氏との共同執筆)
 - 一三 『風葉和歌集 新注二』青簡社、二〇一六年五月
- 共著(雑誌)
- 一 『日本の名句名言666』学燈社、一九八一年七月
 - 二 『古典文学動物誌』学燈社、一九九四年一〇月
 - 三 『キーワード100 古典文学の述語集』学燈社、一九九五七月
 - 四 『古典文学植物誌』学燈社、二〇〇二年七月
 - 五 『宿木 前半』(源氏物語の鑑賞と基礎知識『国文学解釈と鑑賞』別冊) 至文堂 二〇〇五年六月

II 論文(すべて単著)

- 一 「誹諧歌―和歌史の構想・序説」『国語と国文学』 東京大学国語国文学会一九八一年一〇月
- 二 「誹諧歌から和歌へ―和歌史構想のために」『国語と国文学』 東京大学国語国文学会 一九八三年一月
- 三 「戯れ歌の時代―平安後期和歌史の課題」『国語と国文学』 東京大学国語国文学会 一九八六年七月
- 四 「雑林の特色と構造」(二冊の講座『古今和歌集』) 有精堂、一九八七年三月
- 五 「和歌とことばあそび」論集『和歌とレトリック』(和歌文学会編) 笠間書院、一九八六年九月
- 六 「女歌的なるもの―恋歌の基底」『日本文学』 日本文学協会、一九八七年五月
- 七 「天界を恋うる姫君たち」『国語と国文学』 東京大学国語国文学会、一九八七年一〇月
- 八 「和泉式部の花と夢の歌」(論集『和泉式部』和歌文学会編) 笠間書院、一九八八年九月
- 九 「乞食者考―袋草紙希代歌から」『鹿兒島女子短期大学紀要』 一九八八年三月
- 一〇 「雪の山にや跡を消なまし―大君物語と伊勢物語―」『日本文学』 日本文学協会、一九八八年五月
- 一一 「和歌的マジックの方法―定家の梅花詠」『日本の文学』 第四集 有精堂、一九八八年十一月
- 一二 「かごめかごめ考―遊びと呪文歌」『鹿兒島女子短期大学紀要』 一九八九年三月
- 一三 「たけくらべ」における伊勢と源氏」『鹿兒島女子短期大学紀要』 一九九〇年三月
- 一四 「朧月夜の物語―源氏物語の禁忌と王権―」『源氏物語の探究』 第一五輯 風間書房、一九九〇年三月
- 一五 「花の歌・夢の歌―式子内親王の場合―」『鹿兒島女子短期大学紀要』 一九九一年三月
- 一六 「和泉式部と仏教」『国文学』 解釈と鑑賞 至文堂、一九九一年五月
- 一七 「神功・応神神話と八十島祭―武内宿禰の造型を通して―」『日本文学』 日本文学協会、一九九一年二月
- 一八 「源氏物語取りの和歌」『源氏物語講座』 第八卷 勉誠社、一九九二年一月
- 一九 「老岐の百合若説経―話型の分析を通して―」『鹿兒島女子短期大学紀要』 一九九二年三月

- 二〇 「源氏物語における住吉信仰―神功・応神神話をめぐって―」『鹿兒島女子短期大学紀要』一九九三年三月
- 二一 「齋宮の母・六条御息所」『日本文学』(五月号) 日本文学協会一九九三年五月
- 二二 「花に物思ふ春―式子内親王A百首考―」『論集 中世の文学韻文篇』明治書院一九九四年七月
- 二三 「天照大神の巫女たち―御息所そして源典侍―」『新物語研究』三 有精堂、一九九五年一月
- 二四 「もうひとつのゆかり―桐壺更衣・六条御息所から明石君・明石姫君へ―」『源氏物語の視界』三 新典社、一九九六年四月
- 二五 「源氏物語とアマテラス」『アマテラス神話の変身譜』森話社、一九九六年一〇月
- 二六 「源氏物語と法華経」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九九六年一月
- 二七 「源氏物語と呪歌―末摘花・近江君の場合―」『共立女子短期大学文科紀要』一九九七年三月
- 二八 「和泉式部と紫式部」『王朝和歌を学ぶ人のために』世界思想社、一九九七年八月
- 二九 「皇大神宮儀式帳をめぐって―齋宮と大物忌―」『古代文学三七号』武蔵野書院、一九九八年三月
- 三〇 「藤壺造型の位相―逆流する『伊勢物語』前史―」『源氏物語研究集成』第五卷 風間書房、二〇〇〇年四月
- 三一 「源氏物語における采女伝承―安積山の歌語りをめぐって―」『源氏研究』九号 翰林書房、二〇〇〇年四月
- 三二 「古の本性にこそはあらめ」『国文学』(七月臨時増刊号) 学燈社二〇〇〇年七月
- 三三 「源氏物語の病と密通」『日本文学』日本文学協会、二〇〇一年五月
- 三四 「女歌と夢」『想像する平安文学 第五卷』勉誠出版、二〇〇一年一〇月
- 三五 「夢歌の位相―小野小町・以前以後―」『万葉への文学史、万葉からの文学史』笠間書院、二〇〇一年一〇月
- 三六 「歌人としての紫式部―逸脱する源氏物語作中歌―」『源氏物語研究集成』第一五卷 風間書房、二〇〇一年一二月
- 三七 「女が夢を見る時―夢と知りせばさめざらましを―」右文書院、二〇〇三年一月
- 三八 「儀礼と私宴―葛城王の歌語り―」『古代文学』四三号、武蔵野書院、二〇〇四年三月
- 三九 「夢想の時代―和歌の夢・散文の夢―」『院政期文化論集5 生活誌』森話社、二〇〇五年一月

- 四〇 「平城天皇というトボス―歴史の記憶と源氏物語の創造―」『源氏物語 重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年 四月
- 四一 「浮舟―女の物語へ―」人物で読む源氏物語 浮舟」勉誠出版、二〇〇六年十一月
- 四二 「平安和歌における神と仏―袋草紙―」『王朝文学と隣接諸学2 王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎、二〇〇七年五月
- 四三 「手枕：万葉から和泉式部まで」『古代文学』四七 武蔵野書院、二〇〇八年三月
- 四四 「葉子の変と平安文学―歴史意識をめぐって―」『愛知県立大学文学部論集』第五六号、二〇〇八年三月
- 四五 「源氏物語と能―古典と新作―」『国立能楽堂』NO・302 二〇〇八年一〇月
- 四六 「秋好中宮」『王朝文学と隣接諸学6 王朝文学と斎宮・斎院』竹林舎、二〇〇九年五月
- 四七 「浮舟の歌―伊勢物語の喚起するもの―」『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年五月
- 四八 「日本の戯歌―諧謔の詩の起源―」『いくさの物語と諧謔の文学史』三弥井書店、二〇一〇年一〇月
- 四九 「正統と異端の十歌人」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇一〇年一〇月
- 五〇 「憑く夢・憑かれる夢―六条御息所と浮舟―」『夢と物の怪の源氏物語』翰林書房、二〇一〇年一〇月
- 五一 「女流歌人―その挑戦―」『和歌史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇一一年八月
- 五二 「和歌の人称をめぐる覚書」『日本文学』日本文学協会、二〇一一年二月
- 五三 「紫式部」と貫之―『源氏物語』における引歌表現』『紫式部と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一二年二月
- 五四 「平城太上天皇の変」の波紋としての歴史語り・文学・伝承―第二次世界大戦下から中世・古代へと遡る』『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として―』翰林書房、二〇一二年二月
- 五五 「源氏物語の儀礼と和歌 裳着を中心に」『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年一〇月
- 五六 「宇治十帖の雪景色―恋死の歌から官能的な生の歌へ―」『むらさき』武蔵野書院、二〇一二年一月
- 五七 「一人称かな日記の成立をめぐる」『日記・古記録の世界』思文閣出版、二〇一四年三月
- 五八 「いのちの言葉―『源氏物語』近江君の躍動する言説から―」『源氏物語 煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四年三月

- 五九 『ブラジルにおける学術交流記』「若紫巻の「垣間見」―『源氏物語』の絵画を手がかりに」(二〇一三年三月七日於サンパウロ大学・哲学・文学・人間科学部、日本文化研究所における講演記録) 『愛知県立大学日本文化学部論集』二〇一四年三月、
- 六〇 『六条御息所と朧月夜―大臣の娘たち―後朝の歌をめぐる』 『女たちの光源氏』新典社選書、二〇一四年三月、
- 六一 「一人称かな日記の成立をめぐる」 『日記の総合的研究』 思文閣出版、二〇一五年三月
- 六二 『源氏物語』笑いの歌の地平―近江君の考察から― 『二〇一四年パリ国際シンポジウム 源氏物語とポエジー』青簡社、二〇一五年三月、
- 六三 『笑いの歌の源流―芭蕉の排泄表現から』 『愛知県立大学文学文化財研究所紀要』二〇一六年三月
- 六四 「近代日本文学における自我意識の発露―笑いという視点から」 『日出づる国と日の沈まぬ国―日本とスペイン400年目の再会』勉誠出版、二〇一六年三月
- 六五 「日記から『源氏物語』へ・『源氏物語』から日記へ―『紫式部日記』・『とはずがたり』における「われ」の構築」 『日記で読む日本史―日本人にとって日記とは何か』臨川書店、二〇一六年七月
- 六六 「古典文学が放つ権力相対化の力―『源氏物語』と『ラサリリヨ・デ・トルメスの生涯』2015年11月3日「スペイン日本セミナー」における講演録(於スペイン・マドリッド、CEUサンパブロ大学法学部講堂) 『源氏物語と和歌―異端へのまなざし』青簡社、二〇一七年三月
- Ⅲ 書評・学会展望等
- 一 書評「平安歌人伝をよむ(業平・貫之・伊勢・和泉式部・公任)」 『日本文学』日本文学協会、一九八六年五月号
- 二 書評 増田繁夫著 『冥き途―評伝 和泉式部』 『国文学』学燈社、一九八八年八月
- 三 書評 石丸晶子 『式子内親王伝』 『日本文学』日本文学協会、一九九〇年八月
- 四 書評 山中智恵子 『斎宮三部作』 『日本文学』同右、一九九四年五月
- 五 書評 石丸晶子 『式子内親王伝』 『人文自然科学論集』100号東京経済大学一九九五年

- 六 学会展望「後撰集、詞花集時代の勅撰集、私撰集」『文学・語学』一九九五年一〇月号
- 七 書評 今関敏子著『色好みの系譜』『日本文学』日本文学協会、一九九七年七月
- 八 書評 吉井美弥子著『みやび異説―源氏物語という文化』『日本文学』同右、一九九八年四月
- 九 書評 菊池威雄著『恋歌の風景』『国文学研究』早稲田大学国文学会、二〇〇二年一〇月
- 一〇 書評 佐藤和喜著『景と心―平安前期和歌表現論』『国語と国文学』東京大学国語国文学会、二〇〇三年四月
- 一一 学会誌コラム「東アジアという視座」印象記―侵略・支配・家族をめぐる―日本文学協会大会シンポジウム 第五八回大会報告『日本文学』「子午線」二〇〇四年四月
- 一二 学会誌コラム「アマゾン河畔の日本文学研究―アマゾナス連邦大学の学会に参加して―」日本文学協会『日本文学』「子午線」二〇一六年一月